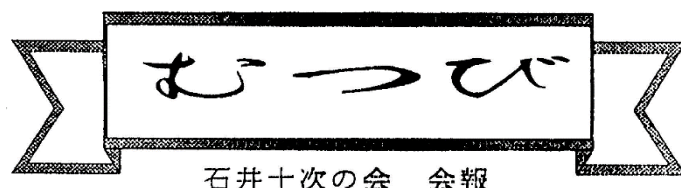


2025 年
(令和 7 年)
8 月 14 日



335 号

石井十次の会 会報

石井記念友愛社の基本理念「自律主義～自立支援します」に思う

西都市教育長 榎本 浩之

「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ 相愛すべきこと」

石井十次先生の言葉です。ウクライナでの戦争や中近東紛争など緊迫した世界情勢を鑑みると何と大切な言葉だろうと改めて考えさせられます。石井先生の目指されていた世界は、孤児救済に留まらず、愛と感謝に満ちた平和な社会の構築にあったようにも思われます。

さて、この石井十次の会の会報「むつび」の原稿執筆を依頼されてから何を書こうかと迷いましたが、まずは私自身が石井記念友愛社の基本理念を理解することだろうと思いました。すると、4つの基本理念の中の一つ「自律主義～自立支援します」という言葉に目が留まりましたので、ここに係ることについて書かせてもらいます。私は、以前に読んだ立命館アジア太平洋大学の前理事長（元ライフネット生命社長）の出口治明氏の著書にある「義務教育の最大の目的は、“自立”である」という言葉に感銘を受け、勤務した小学校や中学校の教育目標の根幹に「自立」を据えました。義務教育で求める「自立」は、「自分でできることは自分です」「自分の将来は自分で決める」ことのできる能力や姿勢を培うことです。勿論、自立の力が児童生徒ひとりだけで身に付けることを求めているのではなく、茶臼原小学校の長友裕之前校長が勧める「他者依存（他人にも頼っていい）」も含まれているものと捉えています。この「自立」をキーワードとした教育活動は、昨年度から市内の

すべての小中学校において様々な形で児童生徒の具体的な姿に現れるように実践してもらっています。これらの取組は、友愛社の掲げる「自律主義～主体性の確立した行動力・実践力を身につけた人格を養う」に合致するものではないかと勝手に思っています。

話は少し変わりますが、以前「ゆうあい通信 第391号 令和6年10月10日号」に掲載されていた児嶋草次郎園長の「理由を目的化する」を拝読しました。その中に卒園生のSさん（岡山理科大学4年）の手紙の内容が紹介されており、彼女は教員になることを志し、見事、宮崎県教員試験に合格したとの報告がありました。その報告の中にこんなことも書かれていました。

「置かれた場所で自分が楽しむ方法を考える」「夢は叶えるためにあるもので、小さなことでも夢にしていき、自分は必ずできるんだと言い聞かせ、夢を追い続けてください」と。何と素敵なメッセージなのでしょう。多分に夢に辿り着くまでには不安や悩みが多かったと思いますが、周囲の人々に支えられ、たくさんの努力があったことでしょう。まさしく「自立（自律）」そのものの姿が表れています。きっと、Sさんは素晴らしい先生となることでしょう。子どもたちと一緒に泣き、笑う彼女の姿が目には浮かびます。できれば将来、西都市の教壇に立ってくれることを願っています。

このように、石井記念友愛社の掲げる基本理念は、友愛社の内包的な活動に留まらず、すべての教育活動に共通するものだ理解できます。とりわけ、「自律主義」の視点は、先行き不透明なこれからの未来社会に最も必要な指針のように思えます。西都市の進める義務教育にも大いに参考にします。

十次の郷土愛から来る諸事業

石井十次は明治 27 年 3 月に高鍋に帰国したとき、日向灘を望んで「帰国途上の所感」を詠みます。

「ああ美なるかな日向の地、予は実に爾^{なんじ}を愛す」という詩に表現されたように、十次の日向の地に対する愛情は深く、その強い郷土愛から十次は様々な事業を興しました。これらの事業は、孤児たちの自立のためでもありましたが、それだけでなく郷土に生きる人々のために思って興したのも多かったのです。十次は孤児院経営に全力をあげながら、同時に郷土のために色々な事業を行ったことは驚くべきことです。

（１）十次の郷土愛によるさまざまな事業とは

まず、明治 29 年、高鍋町小丸に日州活版所を作ります。院児に印刷技術を覚えさせ、自立を後押しすると同時に、高鍋に出版文化を広める目的がありました。

次に明治 30 年に、人間が独立してゆくためには勤儉貯蓄をしなければ独立心はわからない、そのために銀行を作るべきだ、という考えから日向銀行の設立を発起して、その会合を何度も重ねて、その年の 6 月 1 日に設立総会を行いました。

さらに高鍋町御屋敷^{たかなべちようおやしき}地区、いま高鍋高校のある場所に孤児院経営の精米所を作ります。蒸気で動く精米機械を導入して、精米を行います。

当時、高鍋の農民が高い値段で肥料を買わされているのを見て、十次は何とかしてもっと安く手に入らないか、ということを考えました。そこで黒水長鑑^{ちようざん}や柿原正一^{かきはらまさかず}という人々の協力を得て、肥料購入会を設立しました。肥料購入会で安く肥料を購入できるようになった農民は、十次に感謝しました。

高鍋地方の製糖業者をまとめて、砂糖製造会社を作りました。当時は砂糖黍^{さとうきび}があちこちに植えてあって、砂糖づくりが盛んでした。砂糖業は川南の松浦健太郎という人が四国の香川県から 2,200 貫の砂糖黍を持ってきて普及させたものでした。高鍋と上江には砂糖製造会社が 30 戸ほどありましたが、仲買人に買ったたかれて利益があがりませんでした。愛媛県今治の熊野長太郎という、クリスチャンの実業家を招いて指導をうけ、彼の紹介で大阪の大問屋・川上卯助^{うすけ}と直接取引して、砂糖業者の利益を増やしました。堤巽^{つつまつみ}という人物と協力して、上江株式会社という簡易金融機関を設立しました。

小丸川の広谷用水路の蛇ヶ渕^{じやヶふち}から水を揚げて、木城・高鍋方面の灌漑をしようという計画にも加わりました。この計画は、その時には成功しませんでした。後に山口弘康という人が完成させました。

（２）十次、茶臼原に孤児を移し、事業に拍車をかける

明治 30 年に岡山から孤児 40 名を船便で茶臼原に送ったとき、赤痢が発生し 4 名が亡くなる

という悲劇がおこりました。十次はこれを「火のバプテズマ（火の洗礼）」と名づけました。しかし困難にひるむことなく、茶臼原移転を続けます。明治 39 年に東北は大凶作となり、貧しい農家が多数発生。十次はそれらの農家から、無制限に貧児や孤児を受け入れます。その翌年に孤児を茶臼原に送ります。明治 41 年に十次も茶臼原に移りますが、腎臓病が重くなり、視力障害が発生して、2 か月間を暗室で過ごさなければなりませんでした。

健康が回復した明治 42 年 4 月に、社会教育活動を推進する高鍋弘道会^{こうどうかい}を結成しました。当時、高鍋や上江は風紀が乱れて子供の教育上よくないので、聖書で家庭を清め、二宮尊徳の徳によって地区を清めるという目的から設立された道德会でした。会員は高鍋・上江の両村長、小学校校長、農学校校長の斎藤角太郎、石井十次、西内天行^{にしうちてんぎょう}などでした。

次に、小丸川河心改修期成同盟会^{かしん}を設立します。小丸川の洪水を防ぐために河の流れを変える工事、堤防を築くのですが、このような土木工事は費用がかかり国の補助が必要なので、同盟をつくって国に働きかけたわけです。地主 121 名を集めて、久保昌業^{くぼまさなり}（後に高鍋町長）が会長になりました。大正元年に認められ、十次が亡くなった大正 3 年に工事が着工されました。

上江村と高鍋村の合併問題にも取り組みました。十次は合併推進派で、利害を超えて将来の発展のため合併すべきだと主張しました。しかし利害問題が解決せず、残念ながら合併は実現しませんでした。

（３）十次、孫三郎の協力を得て不動産業を営む。その後政界進出を計画する

上江村の豪農が、貸し倒れのため田畑を根こそぎ債権者に取られるというので、十次に救済を訴えてきました。十次は大原孫三郎から金を借りて救済しました。すると次々に救済してほしいとの依頼が舞い込みました。十次は孫三郎の協力をもとに、明治 42 年に日向土地株式会社を設立します。経済的理由から土地を手放さなければならない地主から土地を買い取り、需要家に転売する事業です。買い取りから転売まで時間がかかるので、その間の資金が必要です。その資金を孫三郎から借りました。会社は十次没後に解散しましたが、孫三郎は同社の所有地の全部を寄付して財団法人「済美財団」^{さいび}を設け、岡山孤児院^{がいかく}の外郭団体としました。

十次は孤児院経営の苦勞から、社会改革のためには政治活動が不可欠であると考えていました。そこで国政選挙に立候補して政界に出ようとして大原孫三郎に相談しました。いつもは十次の考えに賛成する孫三郎は、このときばかりは強く反対しました。十次があまりにも多くの負担を抱え、健康が保たない^もと考えたからです。十次は立候補を断念しました。孫三郎の判断は正しく、十次はその後 2 年間生きることができました。

明治 44 年、三女・基和子が亡くなった年に、十次は高鍋製糸会社の社長を引き受けました。その後の経過はすでに別稿で書きましたので、ここでは省略します。

（編集委員 石川正樹）

大自然の中で生きた子ども時代

盆になるといつも思い出すことがある。それは昭和 30 年代、わたしが小学生のころのご馳走で、盆と正月だけ炊いてもらえる真っ白く輝く米飯のことだ。かまどで炊いた米飯はもちもちしていて格別。羽釜の底にこびりついているおこげを食べたくて早朝からこっそり起き出し、つまみ食いしていたものだ。

当時の食生活を振り返ると、ほかにも懐かしいあの頃が次々と思い出される。

弁当のおかずの中でのお気に入りにはメリケン粉焼き。これは卵とメリケン粉（小麦粉）を混ぜて卵焼き風に焼いたもの。卵が手に入ったときに母が作り、これを均等に切り分けてみんなの弁当に入れてくれる。ほかには、梅干しと漬物が入れてあったと思う。定番は日の丸弁当で、盛りのいい麦飯の端っこに味噌や漬物が入れてあった。分校では薪ストーブのまわりに先生手作りの弁当入れが用意しており、冬場には昼食前全児童の弁当を温めてくれた。同時に、大きなボウルに入れた脱脂粉乳も温めていた。しばらくすると、おかずのいろんな香りが教室中にただよい、学習中のわたしたちの集中力を欠いたことを覚えている。

わたしの両親はいつもいつも炭焼きや農作業に明け暮れていた。特に休日等、おやつの準備をしてもらった記憶はなく、その余裕はなかったはず。そこで、育ち盛りのわたし達兄妹 4 人は裏山でアケビ、シイの実、生栗、ニッケをとり、原っぱに行けばサドガラ(イタドリ)やスイスイゴンボをかじった。また、ようやく実ってきたキュウリや生のサツマイモをとっては空腹を満たしていた。

平日は、学校から帰ると粳の脱穀が日課になっていた。週 1 回程度、石うすで米粉やそば粉を兄妹で交代しながら挽くのも幸せなひと時だった。石うすがひと回りするごとに粉がサラサラッと落ちるさまが好きだった。大変だったのは、水が少なくなると兄と 2 人で近くの谷から水を何回も運ぶこと。それでもいやだと思ったことはない。わたし達は自然の中で多くの体験をし学びの多い時を過ごすことができた。

（編集委員 黒木 三鶴）

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【高原町】末永 淳子 勝吉 俊一【宮崎市】綾部 功士 明松 美佳 中山ゆかり
深澤 保乃【えびの市】小多田将志 【神奈川県】財津 吉浩

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【都城市】荒木 秀一 【西都市】小田切美智子【木城町】小野 浩司
【東京都】児玉 公人・千恵美【愛知県】田爪 光信

*ここまでの掲載者は編集等の都合により 7 月 20 日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

〒 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●西都市教育長 榎本浩之様には、公務ご多忙な中、巻頭言に玉稿をいただき感謝申し上げます。石井記念友愛社の掲げる基本理念のうち「自立」をキーワードに、市内の小中学校で取り組まれていることに感銘を受けました。

（編集委員 黒木三鶴）